

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（学術）	氏名	川本 大史
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論文題目			
<p style="text-align: center;">社会的排斥が個人の認知・感情・行動に及ぼす影響</p> <p style="text-align: center;">— 個人内・個人間過程に着目した検討 —</p>			
論文審査担当者			
主査	准教授	入戸野 宏	
審査委員	教授	早瀬 光司	
審査委員	教授	坂田 省吾	
審査委員	教授	岩永 誠	
審査委員	教授	坂田 桐子	
〔論文審査の要旨〕			
<p>他者と良好な関係性をもつことは、人間にとって重要な意味がある。他者から無視されたり拒絶されたりすることを社会的排斥とよぶ。社会的排斥を受けると、被排斥者にはネガティブな感情反応である社会的痛みが生じる。本論文では、社会的排斥が個人の認知・感情・行動に及ぼす影響を、この研究分野における標準的な実験手続きであるサイバーボール課題（コンピュータ画面上でのキャッチボール）を用いて検討した。</p> <p>本論文は8章から構成されている。第1章では、社会的排斥に関するこれまでの研究を概観し、本論文の中核となる「個人内・個人間過程モデル」を提案した。社会的排斥に対する個人内の認知処理は、検出（異常の発見）・評価（脅威性の評価）・制御（脅威への内的対処）という3段階に分けられる。十分に制御できないときは社会的痛み（ネガティブな感情反応）が生じる。その結果、外部環境のモニタリングが行われ、得られた手がかりに応じて異なった対人行動（向社会的行動と反社会的行動）が生起するというモデルである。</p> <p>第2章では、社会的排斥の処理にかかわる神経基盤について、機能的磁気共鳴画像法を用いて検討した。その結果、社会的排斥によって前部帯状皮質背側部と右腹外側前頭前皮質が賦活することが認められた。質問紙で測定した社会的痛みとの相関から、前者が社会的排斥の検出、後者が社会的排斥の制御と関連することが示唆された。</p>			

第3章では、社会的排斥の検出段階について、脳波の一種である事象関連電位を用いて検討した。他者から一時的に選択されなかった試行において、フィードバックエラー関連陰性電位が生じた。この電位は、第2章で賦活が認められた前部帯状皮質から発生することが知られている。社会的排斥を示すわずかな手がかりであっても敏感に検出されることが示唆された。

第4章では、サイバーボール課題中の心理生理反応の時間的変化を検討した。その結果、社会的排斥を受けると、排斥手がかりに対する注意は時間経過に伴って減衰し、ネガティブ感情は増大し、回避動機づけが高まることが示された。

第5章では、被排斥経験後の認知と行動の変化を検討した。その結果、顔表情写真に対する神経反応や行動反応は、被排斥経験によって変容することが示された。具体的には、中性表情に比べて嫌悪表情に注意が強く向けられるようになり、笑顔に対する表情模倣が増大した。

第6章では、被排斥経験後に攻撃性が高まる一例として、排斥者の笑顔を見た後の行動反応に注目した。その結果、受容を期待している他者から排斥され、その人の笑顔を見たときに、排斥者に対する攻撃性をもっとも高まった。

第7章では、社会的排斥検出の個人差に注目し、排斥検出能力という概念を提唱した。排斥検出能力とは、社会的場面で違和感を覚える敏感さを指す。質問紙調査により、排斥検出能力が高い人は他者から受容される経験が多かった。また、排斥検出能力の個人差は、顔表情写真に対する事象関連電位の反応にも現れた。

第8章では、総合考察として、本論文で提唱した社会的排斥の個人内・個人間過程モデルの妥当性や意義を、先行研究と比較しながら検証している。また、本論文の限界を指摘した上で、モデルの拡張可能性についても議論している。

本論文は、社会的排斥にかかわる認知過程を、堅実な手法によって多角的に分析したものである。特に、社会的排斥の認知処理を3段階に分けたこと、排斥検出能力を概念的・実証的に検討したことは、この分野の理論的発展に寄与すると期待される。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（学術）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。